

第4回多摩川流域歴史セミナー

『中世 多摩川流域の開発』

講演：深澤 靖幸氏

－開催報告－



『多摩川50景』 是政の多摩川

平成29年2月5日（日）
多摩川流域懇談会

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

講演『中世 多摩川流域の開発』

講演： 深澤 靖幸 氏

■低地開発はいつからか？

本日は、「中世 多摩川流域の開発」について、特に府中を中心とした中流域の多摩川低地における開発の様子を少し紐解いてみたいと思います。

多摩川流域の低地にいつから人々が進出し始めたかについては、必ずしも均一に発掘調査が進んでいるわけではないため、調査箇所毎に得られたデータから、段階的に開発が進行したとは現時点では言えないと思います。

多摩川流域は、縄文時代の中期の遺跡が非常に多く出ます。しかし、後期になると遺跡が少なくなり、晩期にはわずかとなってしまいます。そうした中、府中の競馬場や大國魂神社の崖線の下あたりには、晩期の土器が多く見つかります。そのため、台地上に集落の基盤を置いていた縄文人は、縄文時代後期～晩期にかけて、崖線下の低地に移動したと考えられます。また、多摩川左岸の東京競馬場内や多摩川右岸の落川・一宮遺跡の発掘調査では、弥生時代の土器や石器が出てきました。このことから、弥生時代の人々が低地にも少し活動痕跡を残してくれていることがわかり始めたところです。

古墳時代（6世紀～7世紀前半）になると、いわゆる「はけ」からほど近い低地に集落が営まれていたようです。さすがに古墳時代には、生業のかなりの部分を稲作が占めていたというふうに推測できるため、集落を営んでいるということは、低地のどこかに水田を開いて経営していたのだろうということが想像できます。ただし、中流域では、まだ古墳時代に明確な水田の遺跡というのは見つかっていないというのが実情です。さらに時代が下がり、奈良時代（8世紀中～後半）や平安時代（10世紀前後）の堅

穴住居が発掘調査で見つかっています。このことから、平安時代後期（10世紀頃）に、低地の開発が大きく行われたのだろうと想像できます。そして、この頃の低地開発では、沖積低地の土地の少し高い「微高地」と言われるところを中心に集落の広がりが見られることから、この頃に低地開発の大きな契機があったと考えられます。

■明治前期の地籍図から読み取れること

明治前期には、600分の1スケールで地籍図がつくられています。この地籍図を現在の2,500分の1スケールの地形図に補正・転写する作業を行いました。

具体的には、600分の1地籍図を全て書き写して、それを2,500分の1に大よそ縮小し、さらにそれを現在の地形図に投影します。投影した時にきれいに揃わないので、何本か基準となる道路、あるいは目印となる田畑や宅地を定点として、一つの土地の区画を割り付けた作業を行いました。このような作業から、明治時代前期には、府中の中心部分に当たる低地はほぼ水田化されていたことがわかりました。この景観は恐らく江戸時代後期もほぼ同じだっただろうと想像できます。

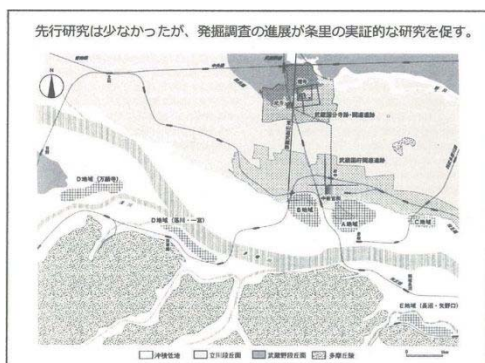
地籍図からは、多摩川の古流路の痕跡が読み取れます。さらに、大國魂神社から南に下る府中街道の微高地に矢崎の集落があり、その微高地を境として東側は東西南北の規則正しい水路や道、畔等の痕跡から、水田が非常に明瞭に判読できるのに対し、西側は少し形が崩れているのが読み取れます。



そして、この地籍図に 109 メートル間隔のメッシュをかぶせます。かなりの部分で、府中街道よりも東側の部分でメッシュと水路、道路、畦畔が合致します。このようなメッシュで示す地割は、一般的に、古代に形づくられた「条里」と呼ばれる土地区画制度の名残と言えます。地籍図から、109 メートルメッシュの地割である条里が読み取れることから、低地開発が古代の開発であったと想像することができるとは、ここ 10 年～20 年で進んでおり、条里は必ずしも古代からスタートしているわけではなく、地域によって様々なケースがあることがわかってきました。そこで、本セミナーでは条里に着目して多摩川中流域の低地開発について検証していきたいと思います。

■発掘調査からの低地開発の時代検証

多摩川流域の中で条里を考古学的に検証できるのは、発掘調査を行った東京競馬場及びその周辺、落川・一宮、万願寺地区の 3 か所に限られます。従って、発掘調査から時代別に検証したことをお話します。



①古代（8 世紀中～後半、10 世紀前後）

東京競馬場構内で見つかった竪穴建物は、8 世紀中頃から後半、及び 10 世紀前後の時代のものが多く見つかっています。すなわち、古代の中で 2 回、竪穴建物が多く作られたピークがあります。このことから、低地での人々の活動は大きく 2 回進行したと考えられます。遺跡から、低地の微高地に集落をつくとともに、かつて多摩川の乱流があった細い流路の痕跡周辺の微低地に水田が開かれた可能性があります。一方で、109 メートルメッシュに合致する水路や道路はほとんど見られません。

従って、この時代では、復元条里地割に合致する遺構は今のところ明確ではないと考えられます。

②中世前半期（12 世紀後半～14 世紀）

同じ東京競馬場構内での中世時代の発掘調査では、南北の溝、道路が 1 本見つかっています。そして、これらは明確に復元条里地割である 109 メートルメッシュに合致します。また、中世に起源をもつ二つの水路（ムコウダイショウ、中ダイショウ）は、発掘した地点では条里の推定ラインとは合致しませんが、上流と下流では復元条里地割とほぼぴったりに合致します。このことから、明治時代初期に確認できた東西南北の条里の土地区画による開発は、12 世紀～14 世紀にかけてさかのぼる可能性が高く、中世の段階には確実に条里は存在したと言えます。

③古代後半（11 世紀頃）

大國魂神社と条里の関係を見ていきます。大國魂神社は、武蔵国の 6 つの主要な神々を合わせ祀った総社（六所宮）と呼ばれる社です。1182 年（寿永元年）源頼朝の夫人政子が懐妊し、その安産祈願のために関東の主要な神社に使者を遣わした社の一つとして、吾妻鏡に書かれています。この総社は、全国では 11 世紀頃に建立されたことはほぼ間違いのないと言われています。

従って、武蔵六所宮の大國魂神社も 11 世紀頃に建立されたと考えられます。この社は、109 メートル



の条里推定ラインに合致するため、条里地割そのものも 11 世紀には存在した可能性があると考えられます。

ただ、台地上に条里地割は存在しないため、大國魂神社が 109 メートルメッシュの条里地割に合致するという事は、低地の条里プランが台地の上にまで想定ラインを引き伸ばして境内域が設定されたと考えられます。

④落川・一の宮の条里（9 世紀後半）

多摩川右岸に流入する程久保川という水路から東西南北にきれいに屈曲する部分が多く確認されています。このような水路のうち、109 メートルメッシュとほぼびたりと適合する場所があり、断片的な条里の地割と思われます。これらの中で、落川遺跡での発掘調査結果から、微高地に集落、微低地に条里ラインと一致する幅 3m の畦畔の遺構が見つっています。この周辺一帯の水田は 8 世紀末のもので、落川遺跡の畦畔は約 9 世紀後半に整備されたと考えられています。条里と 9 世紀後半と推定される落川遺跡の畦畔が合致することから、条里は 9 世紀後半までさかのぼる可能性が考えられます。

⑤万願寺地区の条里（9 世紀前半頃）

浅川と多摩川に挟まれた日野台地の東側に万願寺地区があります。この地区の水路は直線的で直角に屈曲する水路ですが、それほど規則正しいわけではありません。しかし、南北にきれいな溝が 1 カ所ありこれが条里推定ラインと一致します。一般的に、水田は条里推定ラインに合致しますが、ここでは微高地の集落域にある溝と合致します。この溝が水路かどうかは微妙なところで、単なる土地区画や境界線として掘られたものかもしれません。まだ確定的なところは言えませんが、おそらくこの周辺にも条里はあったろうと推定されます。中世前半期の段階に、条里が一部作られその痕跡が集落域の中に延伸されて溝をつくりだしている。その後、何度も起こ

った洪水により溝は消失し明瞭な姿を残していないのだろうと想像しています。

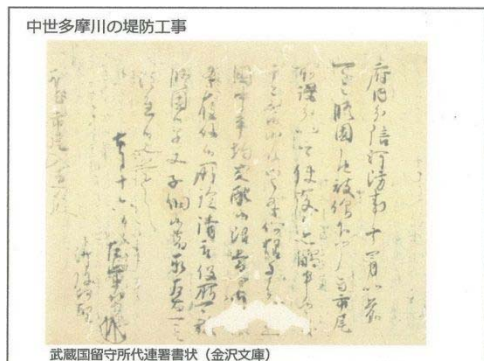
■多摩川中流域の低地開発のまとめ

東京競馬場、落川遺跡、万願寺地区の発掘調査結果から、多摩川中流域の低地開発を検証する上で、中世に条里地割が存在したことはほぼ確実視してよいだろうと思います。落川遺跡で発掘された畦畔は、9 世紀後半にさかのぼる可能性が考えられます。ただし、古代の水田は細長い流路の微低地を利用し、すぐ近くの微高地に集落があるため、一面に水田が広がるという景色ではなく限定的な水田だったと考えられます。府中では、台地上の大國魂神社が条里の推定延長線上に合致するため、古代後半の 11 世紀には条里があったと考えられます。

中世では、古代の限定的な水田範囲と比較するともう少し広い面積だったと考えられます。そして、近世では中世にあった集落を押しつけて微高地も水田化し、明治前期の地籍図にあるような一面の水田と限られた微高地に集落が形成されたと考えられます。このように、長い年月をかけて多摩川の低地は開発され続けてきたと言えます。

■中世多摩川の堤防工事を示す資料

中世多摩川の堤防工事を示す資料があります。金沢文庫に残されている「武蔵国留守所代連署書状」の冒頭に「府内分倍河防事」とあり、沙弥壺聖^{しやみあせい}という役人が市尾入道に、「多摩川の堤防工事をやりなさい。」と督促している内容です。東京競馬場およびその周辺を守るための堤防工事がこの文書で命令されていることがわかります。この文書は、13 世紀末頃の記録であろうと言われており、多摩川の堤防を強化にすることにより、守るべき耕地がその東側にあったことを伺わせる史料と言えます。



また、「吾妻鏡」には、1241年（仁治2年）、多摩川の水を嵩上げて武蔵野の荒野を開発することを決めたことを書いた記録があります。しかしこれは、^{ぼんど}犯土（陰陽道でいう土地を汚すこと）という禁忌に当たり、開発命令を出す将軍が鶴見郷（安達義景の別荘）に^{かたが}方違いをします。すなわち、このまま鎌倉にいたら汚れが来るので、鶴見郷に一時期移り、それから工事を着工しようと考えていたようです。開発すべき土地は、安達義景の別荘から見て北北西の方向にあると書かれていますが、具体的な場所は不明です。

また、^{みのわもうまさ}箕弓師政は、恩賞として武蔵野と多摩野の土地をもらい開発しています。すぐに領地を与えられただけでなく、萱野、多賀谷、恒富という3人を奉行として任命して、直接開発を行わせているということが文献からわかります

次に、肥前国河上神社に残された文書には、仁治2年、長野の諏訪にいた大塩貞重という人物が多摩野に10町の土地をもらったという記事が残っています。

これらを総合すると、13世紀前半の開発によって、条里地割の直接的な延伸や水田域の拡大を促している等の行為につながったと想像できます。

■府中用水の成立

府中あたりの田畑を潤す一大幹線用水として府中用水があります。この用水は、国立市の青柳から取水して流路を延ばしてきています。そして、この灌漑域になっているところは、まさに国立の一部と府中の中心部の水田になります。

これまでは、江戸時代に入っすぐぐらいの段階に、多摩川の大きな洪水によって川が南のほうへ移り、旧流路を使って府中用水が開削されたと理解されてきました。一方で、ムコウダイショウの流れと中ダイショウの流れはもとをたどっていくと、府中用水の主流につながっていきます。すなわち、府中用水からムコウダイショウの流れと中ダイショウの二股に分かれて、それが条里の地割に合致するようにしてこの2つの水路はつくられていると考えられます。このような状況から、府中用水の開削は近世ではなく、中世にさかのぼる可能性が高いのではないかと想像しているところです。少なくとも近世に開削されたと言い切ってしまうのはとても危険だと思います。

私からのお話はこれでひとまず終了とさせていただきます。



【参加者】中ダイショウ、ムコウダイショウの意味を教えてください。

【深澤】これは全くわかりません。問題は、ダイショウというのはどういう意味なのかです。しかし、今のところ伝承も何もなく、そのようにかつて呼んでいたということだそうです。既に水路そのものが競馬場の下に埋もれてしまっている中で、よくその名前を聞き出せたな、というくらいです。そのいわれまでは、わからないという状況です。三十何年か前に府中市では、水路、坂、道等の総合調査を行っています。そのときに地元の方々に丹念に聞き歩いて、調査の中で例えば、水路が何と呼ばれていたのか等を聞き取って地図に書き込んでいます。その地図から、ムコウダイショウ、中ダイショウという知見を得ています。もともとは聞き取り調査の成果だということです。

【参加者】今日説明された時代に、この地域の人口はどの程度だったのでしょうか、前後の時代の人口との比較も含めて教えてください。

【深澤】中心にお話しした中世の人口は、統計的なデータはないと思います。それ以前のことで言えば、古代では武蔵国の人口がどのくらいだとか、そういうことは何となく把握できるという程度であって、これも余り厳密な話ではないです。古代の例では、1つの郷、この場合だと武蔵国多磨郡〇〇郷と呼んでいました。その多磨郡の中には10の郷があったことは確かです。この1つの郷の人口が大体均一化されていて、ほぼ1,200~1,300人だろうと、奈良正倉院の戸籍の分析から言われています。府中近傍あたりで古代においては、千数百人は確実にいたと考えられます。ただ、古代の場合は府中に国府が置かれていて、武蔵国からさまざまな人が労役等、いろいろな目的で集まってくる都市的な空間でした。そのため、国府が置かれた場所はさらに人口が多かったと考えられますので、2,000人くらいの人口は確実にこの府中界限にいたのだらうと思っています。

【参加者】条里制では1町=109メートルが基本とのことですが、五街道の道程では1町=106メートルだったと聞いたことがあります。この関係はありますか。また、1町の単位の根拠（日本の単位）はどうか。また、1町の単位の根拠（日本の単位）はどうかやって決めたのか教えてください。条里の設定基準と当時の測量技術、手法について知りたいです。

【深澤】古代以来、1町の単位は現在の長さに直すと109.09メートルで、江戸時代においても同じです。7世紀後半頃から約109メートルという単位が一般的に使われるようになっていくのは確かだと思いますが、もともとのルーツがどこにあるかということはありません。

【小田】日本で都をつくるときに唐のいろいろな人たちがたくさんやってきて、平城京、平安京、武蔵国府、国分寺等の区割は、みんな中国の尺度でつくっていたのではないかと思います。そういう中で、中世では既に測量技術も発達していたと思います。豊臣秀吉の時代には、測量で棒を立て、糸を引いて測っています。あのような検地は、安土桃山時代には詳しい資料がでていきますので、鎌倉幕府では中国から伝わる測量を行う組織があったのではないかと思います。そのため、原点は中国だと思います。この109メートルのルーツは、度量衡関係の研究組織で発表された方がいれば、その引用文献を調べたらどうでしょうか。

【参加者】どのような目的で条里を行ったか教えてください。

【深澤】条里の目的は、基本的には土地を区画することによってその場所の表示を明らかにすることです。現在の何丁目何番地という表示と同じ目的で、土地をメッシュで地割すると縦何里、横何条ということで表示ができるようになります。水田整備の場合は「条里」を用いますが、都市の平安京を思い浮かべていただければわかりますように、まさに基盤の目状の道路網ができていて、〇条上る〇〇等と言うわけです。それと同様に、条里はその場所を特定



することができるというところに大きな特徴があると思います。

条里は確実に古代からスタートし、都を中心に条里を導入していきます。そして、全国各地で少しずつ開発が進む中、恐らく条里のプランというものが各地でつくられていくのだと思います。ただ、このプランというのは必ずしも土地に明確に刻まれることがなかった所もあれば、ごく一部だけ条里の基準が示されている所もあります。そのような状況の中で、それぞれの土地が〇条〇里に当たるのだという意識が芽生えたと思います。こうした意識があるうちは確実にそこの土地を開発していき、田畑を開墾しようと思えば、そこの領有を主張する必要が生じ、うちの場所は〇条〇里だと言えるわけです。これは大きな意味を持っていると思います。従って、古代にスタートした条里システムが、古代ではごく一部の条里であったのに、その利便性がずっと踏襲されたから、長い歴史の中で条里が拡大し、その後も長く続いてきたと思います。

【参加者】 川を境に同じ高位者が統治するのか。江戸では多摩川左岸、右岸同じ大物が用水をつくっているのか。古代、中世も川を挟んで両側を統制できるのか教えてください。

【深澤】 中世の場合、例えば「吾妻鏡」には、幕府が武蔵野、多磨野の開発を主導していると記述されています。そして奉行まで送り込み、領地を御家人に与えているわけです。与えられた御家人は御家人で、多分自らも自分の領地の開発をするわけです。幕府が主導しある程度のライフライン的なものを整備するが、領地を与えられた人間は、それぞれが自分の土地として一生懸命そこを開発していくという二段構えになったと思います。そういう意味でいえば、広域を統治する権力が存在したともいえるし、それぞれの田畑は領地をもらった武士がそれぞれ経営していくわけで、ある程度の責任は持たされるわけです。

江戸時代、幕府に近い権力というか、かなり大き

な力が働いて、多摩川流域での用水路の開削では六郷用水等で行われたことは確かですが、大きな権力を持った同一人物が用水をつくっているのかどうかは、受益者が全く別な場所で生活しているため、府中用水を整備する時に、例えば幕府が動いているわけではないため、ケースバイケースと思います。

六郷用水であれば、非常に広域を灌漑する長大な用水ですから、少し上の権力者が関与しているように感じますが、府中用水であれば、受益者である府中の村々の人々等が開削していると思います。もちろんそれぞれの地域の領主たちが主導していると思いますが、関係者間で連携をとり合っていると想像します。ただ、用水は誰がどのように開発したかについては、江戸時代の用水のことも、結構規模の大きな日野用水も、そして本日お話しした府中用水や万願寺の上田用水も記録も残されていないため研究成果がなく伝承に頼るしかないといった事情で明確なお答えできなくて申しわけありません。

【小野】 これに関連して、府中用水は、原型が中世にあるのか、という指摘がありましたが、必ずしも地元の領主や農民が開発したわけではなく、記録を見ると、開発された水田を恩賞として武将に与えていることがわかります。これは、恩賞を与える主体が、与えるべき土地を開発するために水田をつくったという言い方ができるのではないかなと思います。与える主体は、鎌倉幕府になります。幕府の権力によって、恩賞として与えるための土地をわざわざ用水を引いて開発させるということではないかな、というふうに思います。

【参加者】 諏訪に住んでいる人が多磨に領地をもらったことについて、熊本の人が書き残していたことがすごく不思議に感じます。

【深澤】 「吾妻鏡」に登場した人物も含めてお話をします。まず箕弓師政、萱間、多賀谷の3名は、武蔵七党の中で言う野与党^{のよ}に属す武士、御家人であり、本拠は荒川、古利根川の流域です。恐らくそこを苗木^{のよ}とする御家人です。そうした人物が奉行になり、



領地として多磨野を与えられていました。この時代は、領地を与えられる際、自分の領地の近くを与えられるとは限らず、遠く離れたところの領地を与えられることもありました。

河上神社の文書にある肥前の話と諏訪の人物については、どういう事情であったかという点、恐らく諏訪に本拠を置いている大塩貞重が、多磨野（府中界限で、多摩川の流域のどこか）に領地を与えられたということになります。そして、箕弓の場合も同様で、1221年に承久の乱が起こり、この時の恩賞として、約20年後に幕府が主導して低地の開発を行い領地として与えたのだらうと一般的に考えられています。こうした人物は、全国各地で承久の乱で活躍し、その恩賞として与えられた領地として、多磨野や全く違うところの領地を与えられたと考えられます。なぜ、諏訪の人が領地をもらったという記録が肥前で見つかっているかは、その人物は、西国にも領地をもらっていると考えられます。承久の乱のときに一緒にもらっているのだらうと思うのです。今まで鎌倉幕府の主体は、武蔵武士を中心とした関東近国の武士です。そのような武士が、承久の乱を経て西にどんどん領地をもらうわけですから、そうなる

管理ができないため、代理を出して現地を管理させること行われる。そうした一環で、肥前に多磨野のことが書かれた文書が残っていると考えられます。このような御家人を西遷御家人という言い方をします。例えば、多摩川流域のあきる野市にいた小川氏は、承久の乱で手柄を立てて領地をもらい、鹿児島の大隅というところに移っています。関東にいた御家人、武士たちは西にも領地をもらい、一族が分派していくという流れがあります。このような状況の中で、文書を残しているため、西に残った文書に、東国の関東武蔵の状況を知ることができるものもあります。



深澤 靖幸 氏 プロフィール



1963 年 東京都に生まれる

1986 年 國學院大學文学部史学科卒業

府中市郷土の森博物館の開館（1987 年）以来、学芸員として勤務。

専門は日本考古学。古代国府・中世府中を中心にした地域史を主たるテーマにしている。

編著書に『遺跡が語る東京の歴史』（東京堂出版）がある。



総合司会・開会挨拶：神谷 博（多摩川流域懇談会運営委員長）

前 3 回の歴史セミナーでは古代シリーズをやってきました。第 4 回を迎える今回から中近世に入ります。今日はその第 1 回ということになります。中近世は歴史的にもいろいろなものが残っていますので、関心のあるお話もたくさん出てくるかと思えます。午前中はこの午後の企画に少し関連して、「府中を歩くと見えてくる！ 多摩川が育んできた流域の歴史」というタイトルで分倍河原の古戦場の跡、湧水、府中用水を歩いてきました。午前中からご参加の方はそのような現場の話も、イメージしながらお話を聞けるかと思えます。



挨拶：小野一之（府中市郷土の森博物館 館長）

前回までのシリーズは古代ということで、武蔵国府が置かれた府中と多摩川との関係がテーマの一つになっておりました。今回からの中世・近世のシリーズは、多摩川中流域の要となったこの辺りが、その後多摩川とどうつながっていったか、あるいはどのような歴史の舞台に多摩川の流域が関わっていったのかという話題に移っていくかと思えます。

中世特有の合戦、近世に至ると、名所としての認識が多摩川で始まるということで、開発の問題、交通の問題、合戦の問題等がキーポイントになると思っています。



まとめ：橋場万里子（パルテノン多摩 学芸員）

対岸の多摩市にも、一の宮や関戸には、水路がかなり張りめぐらされているというお話を伺って、水路を通じてかなり昔の様子に迫ることができ非常に勉強になりました。

多摩市側にも戦国期の有山源右衛門という人物のいた拠点があります。水路が引かれており、周辺の地域に有山田という名前がついていることなどもあり、今日の水路の話とリンクするかなと思いついておりました。その有山氏がいた関戸で、1333 年分倍河原・関戸合戦が起き、鎌倉幕府を滅ぼす途上の戦いが行われています。なぜそこが戦場になったかを考えると、交通の重要な場所でもあり、政治的に重要な立地でもあるという地域性が反映されていることだと考えられます。今回は、1333 年に行われた合戦のこと、関戸の地域性を扱っていきたいと思っています。



まとめ：小田 静夫（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）

古墳時代や奈良・平安時代の遺跡がある府中は大切な国府の場所でした。遺跡地図は、都市開発する時には、必ず発掘調査を行うように示しています。しかし今日深澤さんが話をされた台地の下の低地は、遺跡としては登録されていない場所だったという事ですね。

東京競馬場からは、条里制の跡や近世・近代までの遺跡がたくさん見つかりました。それらを考古学的なデータだけで発表して報告書をつくるのではなく、明治の地籍図と合わせてみることで、いろいろな区画や条里の 109 メートル、そこに合う遺構が考古学からも証明できたということは、非常に大切なことです。

東京競馬場で掘られた A 地区の史料というものから復元された条里の地割は、中世だけにどまらず、古墳時代末からもっと古い時期にまで存在したのではないかということ、提言していたことは、考古学者としての彼の 30 年来の府中における実績だと思います。

今までこのような発表はなかったと思います。この府中の中でまた一つ新しいものを芽生えることができたことを本当にうれしく思います。



閉会挨拶：服部 敦（国土交通省京浜河川事務所長）

午後の部は、深澤さんに大変おもしろい内容の発表をいただきました。条里の視点で物を見ることを初めて知り、今ある通路や水路から物を見るのが、いかにおもしろいかということを感じかせていただきました。また、コメンテーター、小田先生初め小野さん、橋場さんにいろいろとコメントいただきまして、ありがとうございました。

午前の部は、皆さんと歩いて色々なものを発見していくと、多摩川本川だけではなく、その横の平地や水路を含めて多摩川なのだというのを、改めて実物を見ながら確認できました。また、皆さんとも共有できたと思っています。

私ども、常日ごろから皆さんにご理解、ご協力いただいて河川管理を進めていますが、ますます今日のお話のようなことも大切にしながら物事を進めていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いします。



各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。

第4回多摩川流域歴史セミナー

◇開催日 平成29年2月5日(日)

◇開催内容

『中世 多摩川流域の開発』

◇講演者 深澤靖幸氏

◆深澤先生プロフィール

1963年 東京都に生まれる

1986年 國學院大學文学部史学科卒業

府中市郷土の森博物館の開館(1987年)

以来、学芸員として勤務。

専門は日本考古学、古代国府・中世府中を中心とした地域史を主たるテーマにしている。

編著書に『遺跡が語る東京の歴史』(東京堂出版)がある。



表面 各回の歴史セミナー概要を掲載

第4回多摩川流域歴史セミナー会場 府中市郷土の森博物館



◇所在地

東京都府中市南町6-32

◇展示概要

本館、プラネタリウム、復元建築物、公園からなり、府中の歴史・民俗・自然を知っていただける施設です。

多摩川流域歴史セミナーホームページへのアクセスはこちらからー



裏面 会場となる博物館情報を掲載

第4回多摩川流域歴史セミナー『中世 多摩川流域の開発』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

